

# 上海東亜同文書院 大学図書館の世界

—— その激動の軌跡から解き明かす ——

成瀬 さよ子

## 本書を推薦します

本書は、戦前の中国・上海で1901年から45年間存在した国際ビジネススクールと称してもよい「東亜同文書院」（のち大学）における図書館の軌跡を明らかにし、あわせてそこから見える書院史にも言及したユニークな傑作著書である。

東亜同文書院は、その前史として、近衛篤磨公による南京同文書院と、荒尾精による日清貿易研究所をふまえ、1901年、日清間の貿易実務養成をめざすビジネススクールとして荒尾精の構想と根津一の手腕によってスタートした。当初南京同文書院でスタートした日清両国学生と共に教育する仕組みも、東亜同文書院の途中から実現し、まさに日中間の架け橋としての高等教育機関となった。1939年からは旧制大学へ昇格し、それにともない新たに専門部も付加され、5,000名の在籍者を数えた。

この東亜同文書院（以下書院）の開設は、近衛公の知恵で全国の各府県から東アジアにロマンを求めた県費生推薦を中心に優れた学生を集めて発足したが、近衛公が藩閥政府である明治政府に距離を置いたため、前半期は諸経費などの政府からの補助額は少額のまま推移し苦しい財政事情があった。

そのため、本来必要とされた「図書館」は「文庫」と称されるレベルで、その内実は厳しかった。しかも開学初期、1913年には清国軍と革命軍の衝突で最初の校舎が焼失、小規模ながらも図書も全焼、また1937年には根津院長が心血注いで建設した徐家匯の新校舎が、第2次上海事変で放火され全焼した。図書数8万冊と学生達の「大旅行」で蒐集してきた各地の商品見本や伝統工芸品10万点も焼失するという一大災難に見舞われた。

しかし、この大災難は日中戦争下、避難して空校舎になっていた隣接する上海交通大学の一時借用で対応し、失われた図書館の図書回復には日本だけでなく、一部の中国側の寄付団体も加わり、初の10万冊を超える図書冊数に達した。

筆者（藤田）は、上海交通大学との交流会の訪問時に、その時の書院が残した図書台帳を見せてもらったことがある。そこには日本の経済団体、研究機関、満鉄や各地図書館、大学、個人などのほか中国側の大学や図書館からの寄贈も含まれ、日中戦争下にもかかわらず、中国側の協力も加わり図書が寄贈されたことも知った。ここに東亜同文書院の日中友好の基本姿勢の特色が中国側にも理解され、表れているようにも思われた。こうして波乱の歴史をたどった書院図書館の歴史が両国の支援で最高頂に達した。

にもかかわらず、戦局の厳しさの中、日本の敗戦で書院の図書館はじめ、研究所の図書、700コースに及ぶ書院生の大旅行日記、卒論などは民国側に接收され、その後共産党の新政権へと移転される結果となった。

以上のような数奇な運命をたどった書院の図書館史の実態とその動きを初めて解剖したのが、この成瀬さよ子氏の著作である。

成瀬氏は書院を継承した愛知大学図書館の司書職員として定年まで務めたまさに図書館人と言える人物である。戦前の書院を経営した東亜同文会が戦後GHQの手で閉鎖され、新生の「霞山会」となる中で東亜同文会時代に複本として所蔵されてきた大旅行や報告書は、この「霞山会」から「愛知大学」へ移管された。成瀬氏はレファレンス係を担当したときに書院への関心を強く抱いた。その心情を持ち、2004年アメリカの大手大学図書館を歴訪し、書院関係書の所蔵状況を調べる機会を得る中で、アメリカで最大の日本研究の拠点であるミシガン大学図書館のキュレーターで、書院に関心を持つ仁木賢司氏と知り合い、アメリカにおける書院研究にも触れる経験があった。帰国後は、さらに書院研究を広めることに力を注ぎ多大な文献データ整理を行う大きな功績を残した。

また退職後は、愛知大学の旧職員の方々を集めて、以上の成果を書院史として伝える活動も行った。さらに幻となっていた書院図書館の存在と内容を明らかにするためにアジア歴史資料センターの外務省外交史料館（日本外交文書）の調査を徹底的に追及する世界へ入り込み、4年間あまりデータ収集に費やし実像に迫った。

その成果が、この著作に結実する事になった。長年の司書を通して愛大のルーツ校である書院史の中の図書館史を明らかにしたのは、本書が初めてであり、大きな功績だといえる。

しかも、書院の図書館史を明らかにするとともに、それに関係した財政・人事・教育・来訪者・出版ほか書院史とのかかわりにも留意して「書院図書館史から見た書院史」という視点にも触れていて、極めて興味ある成果である。

筆者（藤田）は書院生の「大旅行」誌から、中国・東南アジアの近代と書院史に迫ってきたが、成瀬氏はそこに書院図書館史から迫る分析を成功させており、書院史にさらに厚みを増やした点で、より書院の実情に迫ることが出来たと言える。

今回あらためて成瀬氏の成果をふまえ、日本の近代史関係への研究の進展に貢献できることを期待して、少々長くなったが本書の推薦の言葉とさせていただきます。

2024.6.13

以 上

愛知大学名誉教授（地理学）

元愛知大学東亜同文書院大学記念センター長

理学博士 藤田佳久

# 目次

本書推薦文 .....	2
-------------	---

## はじめに

(1) 目的 .....	6
(2) 上海東亜同文書院大学 (図書館) の歴史 .....	6

## 第Ⅰ章 初期の時代：高昌廟・桂墅里校舎 明治34～大正2年度

(1) 経常予算 (支出額) と図書費について .....	10
(2) 国庫補助金との関係 .....	12
(3) 図書館について .....	14

## 第Ⅱ章 中期 (黄金期) の時代：徐家匯・虹橋路校舎 大正6～昭和12年度

(1) 予算と図書費について .....	18
①-A 大正時代の事業拡大 .....	18
①-B 大正時代の経常費と図書費 .....	20
②-A 昭和 (12年度まで) の事業 .....	21
②-B 昭和 (12年度まで) の経常費と図書費 .....	23
(2) 国庫補助金との関係 .....	23
(3) 図書館について .....	24
①大正時代の図書館 .....	24
②昭和時代 (12年度まで) の図書館 .....	27
③蔵書の推移 .....	29
④閲覧状況 (大正11～昭和12年度) .....	32
⑤学外からの訪問者 (大正12～昭和11年度) .....	34
A. 学外講演者は各界一流の人たち .....	34
B. 学外見学者数 .....	35

## 第Ⅲ章 後期の時代 (大学昇格後)：上海・海格路臨時校舎 (上海交通大学跡) 昭和13～20年度

(1) 東亜同文書院大学予算について .....	38
①昭和13年度の予・決算 .....	38
②昭和14年度以降は予算書で .....	38
③昭和19年度以降の決算書 .....	42
(2) 図書費について .....	44

(3) 図書館について	45
① 図書館全般	45
② 図書館規則の制定	47
③ 蔵書の変化	49
④ 購入図書と寄贈図書	50
A. 購入図書について	50
B. 寄贈図書について	51
⑤ 閲覧について（昭和13～18年度）	51
⑥ 学外の訪問者（昭和13～18年度）	53
A. 学外者講演会	53
B. 学外見学者数	54

#### 第IV章 結果まとめ

(1) 初期の時代（明治34～大正2年度）	58
(2) 中期の時代（大正6～昭和12年度）	58
(3) 後期の時代（昭和13～昭和20年度）	60

おわりに	62
------	----

謝辞	64
----	----

【注釈】	65
------	----

【参考文献】	67
--------	----

資料編 資料1～13	69
------------	----

#### 凡例

1. 本文および資料は、『決算書』と『事業報告書』をもとに作成しており、支那の表記は原文のママとした。また、合計値が一致しない場合もあるが、そのまま使用した。
2. 本文および資料1では原文通り小数点以下3ケタまで表示したが、本文中のグラフおよび資料2・3では、1円未満は四捨五入した。

## はじめに

### (1) 目的

東亜同文書院大学の図書館について、愛知大学図書館に在職時から少しずつ資料を集めていた。退職後かなりの時を経た2019年11月から、本格的に国立公文書館アジア歴史資料センター<sup>(1)</sup>の外務省外交文書のデータベース調査を開始した。東亜同文会の『予算・決算書』は、本学図書館には収蔵されていなかったが、外務省外交文書のデータベースではかなり揃っていた。また『事業報告書』も同データベースではかなり揃っていたが、データベースに欠けている年度を本学図書館(霞山文庫)が収蔵していた。東亜同文書院を知る上で最も基礎となるこの2種類の資料が、これまでベールに包まれてきた東亜同文書院大学の図書館に関する情報を明らかにしてくれると考えたからである。従って東亜同文書院大学図書館の図書費関係については『予算・決算書』を、図書館の具体的な活動については『事業報告書』を軸に紐解く事とした。

### (2) 上海東亜同文書院大学(図書館)の歴史

東亜同文書院は、東亜同文会の会長である近衛篤磨<sup>(2)</sup>が、日本人を育成するための学校を、支那(中国)に設立したいと考え、支那の実力者である両江総督劉坤一と湖広総督張之洞<sup>(3)</sup>らの賛同を得て、1900年に南京に南京同文書院として設立した高等専門学校である。

東亜同文会は、支那に南京同文書院を設立するその2年前(1898年)に、東京の地で中国人が日本を学ぶための学校として最初に「東京同文書院」を設立していたことは、特記に値する。日本と中国の若者たちがお互いに相手の国で、異なる言語を学び異文化に触れ互いに理解に努める、グローバルで崇高な書院思想を育てるという教育の根幹がここに感じとれる。

南京同文書院は、設立して半年も経たないうちに義和団事件<sup>(4)</sup>が起り、南京周辺は危険となり、劉坤一の勧めもあり上海に移転することとなった。その後1901年に上海に東亜同文書院が設立されると、同じ上海の地にあった南京同文書院が合併された。当初南京同文書院は、南京の地に復帰する予定であったが、上海が清国商業上の重要拠点でありその社会上・政治上・外交上のすべての面で大変便益があり東亜の体制を知る上でも重要な役割を果たしていると考えたからであった。

以後東亜同文書院は、租界外地に開設した外国の学校として、日中戦争中も上海の地にあり、約5千人の同窓生を輩出した。この間に高等専門学校から大学に昇格し、多くの若者が中国・アジア等各地で活躍するも1945年8月に日本の敗戦で閉校となり、中国から引き